

2013 年度特定共同研究申請書

1.応募領域（丸を付けてください） 古代史料領域 中世史料領域 近世史料領域 海外史料領域 ○複合史料領域
2.申請課題名 関連史料の収集による長篠合戦の立体的復元
3 新規・継続の別（丸をつけてください） 新規 ○継続
4.申請者 中世史料部門・助教・金子拓
5.所内共同研究者 古代史料部門・助教・藤原重雄／中世史料部門・准教授・鴨川達夫・渡邊正男／同助教・黒嶋敏・須田牧子・遠藤珠紀／近世史料部門・教授・保谷徹／同助教・及川亘
6.希望する研究期間 2010 年度～ 2015 年度 （ 6 年間）
7.課題の概要(400 字程度) （この項は広報等に利用・掲載することがあります） 天正 3 年（1575）5 月に織田信長・徳川家康連合軍と武田勝頼軍が戦った長篠合戦は、本格的に鉄炮を用いた合戦として日本史上有名である。この戦いについては、文書のほか、合戦に参加した武士たちの覚書、系譜史料、軍記物語などの文字史料にとどまらず、合戦屏風・合戦図などの画像史料も豊富に残されている。近年ではこれらの史料にもとづいた研究も少なからず発表され、武田氏の三河進出の経過や、長篠合戦において旧来定説となっていた信長・家康軍による鉄炮の「三段撃ち」などをめぐり、活発に議論が繰り広げられている。本共同研究は、これら合戦関係史料についてジャンルを問わず広く収集し、相互に関連づけながら検討することによって長篠合戦の具体像を明らかにする。
8.研究の目的(400 字程度) 長篠合戦を研究するにあたり、合戦に至る（時間的）経緯や両軍の布陣地などの地理的情報の把握は必要不可欠である。これらの点は、文書・記録をはじめとした良質な史料を綿密に解読することで進める。 いっぽうで覚書・系譜史料、合戦図屏風などは、合戦参加当事者もしくはその子孫により、何らかの意図をもって作成されたものである。史料作成の背後にある意図（史料作成の動機）を正確につかむことで、個々の史料の史料的価値を判断し、合戦像の復元に活かしたい。この作業をとおして、後世の人々が「長篠合戦」という歴史的出来事に何を求めていたのか、どのように読み解こうとしていたのかがわかると思われる。覚書・系譜史料については、2010～12 年度共同研究において、合戦に参加した武士の子孫（近世大名や、その家臣として生き残る）の家に残された史料の所在情報蓄積をおこなった（紀伊徳川家・榊原家・奥平家・島原松平家など）。また、2012 年度から、「合戦の記憶をめぐる総合的研究」（基盤研究 B）の交付を受け、ほぼ同じテーマでの調査研究を開始した。その結果、長篠合戦関係記事を蓄積しえたので、本年度は紀伊徳川家の調査を継続するとともに、さらに範囲を広げて各史料所蔵機関（たとえば阿波蜂須賀家・鳥取池田家など）におもむき、それら覚書・系譜史料を調査して長篠合戦関係記事の収集作業を進める。

また 2010～12 年度においておこなった主要な合戦図屏風の観覧調査をもとに、残された未調査の長篠合戦図屏風の観覧調査を継続させるとともに、屏風模本制作にむけての下準備をおこなう。
9.共同利用・共同研究として進める意義と期待される研究成果(400 字程度) 本共同研究は長篠合戦を中心とした合戦史料の収集と研究が目的だが、最終的にそれら史料を収める史料集(『大日本史料』)刊行を目指している。編年史料集という性格や、編纂作業の特殊性から、『大日本史料』は史料編纂所の担当者が責任をもって編纂刊行する体制をとっている(もちろん従来もその都度所外の研究者の協力・助言を仰いでいることはいうまでもない)。 長篠合戦を収録する予定の『大日本史料』第十編の一冊は、史料の分量から、合戦当日一日が一冊になると予定されている。編年史料集でありつつ、事件史的史料集の性格もあわせもち、また死去した人物の卒伝を収めるなど人物史的史料集の一面もある『大日本史料』だが、合戦当日一日が一冊という特殊な構成をとることにより、それら複数の性格を象徴的に示す冊になるだろうし、所外研究者の編纂協力を得られやすいという利点もある。共同研究が史料編纂所の基幹的業務である史料集編纂にどのように関わることができるのかを試みる実験的作業にもなると期待される。
10.研究の実施計画 ・研究会の開催 研究成果の公開と情報の共有化を目的とした研究会を開催する。 (2010 年度は、長篠での研究会・現地調査、史料編纂所での研究会・落合左平次背旗など長篠関係史料の調査を行った。2011 年度は犬山で犬山城白帝文庫所蔵屏風の調査および研究会を行った。2012 年度は大阪城天守閣にて合戦図屏風関係の研究会を開催する予定である) ・関係文献史料の調査 2010～12 年度に引きつづき、合戦に関する覚書・系譜史料の所在情報蓄積を継続させつつ、史料所蔵機関への調査を行なう。具体的には和歌山県文書館・徳島城博物館などである。 ・合戦図屏風の調査 2011 年度は犬山城白帝文庫所蔵屏風の観覧調査を行い、愛知県史主催の研究集会に参加して合戦図屏風研究に関する情報収集を行った。2012 年度は豊田市博物館・大阪城天守閣所蔵の屏風調査を行う予定である。本年度はそれらの成果を総合し、屏風模本制作のための研究を進める。 ・史料稿本データの大日本史料総合データベースへの格納のための整形作業 ・合戦史料の収集(長篠合戦以外の合戦を対象とする)
11. 研究成果の公開計画 収集した史料は『大日本史料』第十編の一冊として刊行する(2019 年度予定)。 入力した史料稿本フルテキストデータを大日本史料総合データベースに格納する。
12. 共同研究員にもとめる役割 長篠合戦に参加した武士の末裔が作成した覚書・由緒書(主に近世史料)などを共同して調査、解説する。画像史料に関心を持ち、文献史料を念頭におきながら合戦図屏風の調査と解説をおこなう。合戦で戦死した武将について、伝記的史料の収集調査をおこなう。